



TITLE:

# 歴史學派の先驅者としてのリチャ アド・ジョーンズ

AUTHOR(S):

堀, 經夫

---

CITATION:

堀, 經夫. 歴史學派の先驅者としてのリチャアド・ジョーンズ. 經濟論叢  
1927, 24(4): 656-676

ISSUE DATE:

1927-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128528>

RIGHT:

大正四年六月二十一日第三種郵便物認可 (毎星期一、四、日發行)

京都帝國大學經濟學會

# 經濟叢論

第四號

第二十四卷

昭和二年四月一日發行

## 論叢

古代の港

教授 文學博士

三浦 周行

俱樂部稅論

教授 法學博士

神戸 正雄

ミルの經濟學概念

講師 文學博士

米田 庄太郎

歴史學派の先驅者としてのリチャード・ジョーンズ

東北帝國大學教授 經濟學士

堀 經夫

## 時論

日本の對支好意政策の境界

教授 文學博士

矢野 仁一

海軍制限に關する米國の提議

教授 法學博士

末廣 重雄

## 說苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田島 錦治

産業としての林業の本質

經濟學士

平田 憲夫

パンタレオニシ經濟學基礎概念

經濟學士

松岡 孝兒

## 雜錄

印度の雨

教授 法學博士

財部 靜治

(裝 轉 載)

## 歴史學派の先驅者としてのリチャード・

## ジョーンズ

は し が き

堀 經 夫

カアル・マルクスは、其の遺著『剩餘價值學說史』の第三卷に於て、七十一頁をリチャード・ジョーンズ(The Rev. Richard Jones 1790-1855)の學說の紹介及び批評に充て、又其の著『資本論』等の中に於て、屢々ジョーンズの著書を引用して居る。併し、マルクス以前に於ては勿論のこと、マルクス以後に於てすら、ジョーンズに注目せる學者は甚だ稀である。但し、かのジェイ・ケイ・イングラムの如く、ジョーンズを以て歸納學派若くは歴史學派の祖となし、彼に經濟學史上の或る地位を與へんとする者や、エドキン・キャナンの如く、リチャードの地代論に反對なる學說の信奉者としてのジョーンズを絶介する者や、又かのボエーム・パウエルクの如く、利子學說に對して『重要な貢獻を何一つなさざりしジョーンズ』の名を記するに止むる者はあるが、併し、今日までのところ、彼れの主なる學說を最も詳細に研究し且つ最も高く評價せし人は、何と言つてもマルクスである。

- 1) cf. J. K. Ingram, A History of Political Economy, New edition. (1915) pp. 139-142.
- 2) cf. E. Cannan, A History of the Theories of Production and Distribution. (1917). pp. 333-5.
- 3) cf. E. v. Böhm-Bawerk, Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien. (1921). S. 90.

ジョーンス生前の主なる著書は次の二つである。

(1) *An Essay on the Distribution of Wealth and on the Sources of Taxation*. Part 1. Rent. 1831.

(2) *An Introductory Lecture on Political Economy*, delivered at King's College, London, February 27, 1833.

To which is added a Syllabus of a Course of Lectures on the Wages of Labor, proposed to be delivered at King's College, London. 1833.

(3) *Text-Book of Lectures on the Political Economy of Nations*, delivered at the East India College, Haileybury. 1852.

マルクスは、其の『剩餘價值學說史』の中に於て、右の三書のみを紹介してゐるが、併しジョーンスの死後、彼れの友人達即ち The Rev. William Whewell 及び John Cazenove によつて出版せられたる彼れの『遺稿』(“Literary Remains, consisting of Lectures and Tracts on Political Economy, of the late Rev. Richard Jones. Edited, with a Prefatory Notice, by The Rev. William Whewell.” 1859.)の中には、前記の著書<sup>2)</sup>及び<sup>3)</sup>の外に、マルクスが閱讀し得ざりし數個の『講義』『小冊子』『覺書』が輯められてゐる。

Whewell の言ふ所によれば、『彼(ジョーンス)は、經濟學に關する彼れの思索に一つの完全なる體系を與へ度いこの希望を、死ぬる時まで大切に懷いてゐた』のであるが、それは、彼れの實際的活動家としての仕事に妨げられて、終に實現されなかつた。従つて、彼れの主著『分配論』も『第一部、地代論』のみで終つてゐるのである。併しながら、前掲の『講義』等は簡單にはあるが經濟學一般に亘つて説かれてあるから、その中より彼れの學說の體系及び其の特徴を見出すこと

4) *Literary Remains*, p. xxxix.

5) Jones は、Tithe Commisssioner, Secretary to the Capitular Commission, One of the charity Commissioners for England and Wales などになつた。

は、必らずしも困難ではない。たゞ本稿は、彼れの學史上の地位の究明を其の主たる目的とするに止まり、生産論及び分配論に於ける彼れの個々の學說に就ては、他日稿を改めて之を論ずることとする。

## 第一節 資本主義的生産方法の歴史的解釋

正統派經濟學者殊にかのディン・リカアドは、資本主義的生産方法の内部的機構の解剖に餘り没頭し過ぎた結果、其の歴史上に於ける相對的地位を顧みることが出来なかつた。従つて彼は、抽象的、原則の樹立及び其の普遍化に専念した。これ彼が演繹學派の代表者の如く普通考へられて居る所以である。勿論リカアドといへども、事實を離れて理論を立て得なかつたであらうことは言ふまでもないが、併し彼は、眼前の各種の事實を餘り所なく捕捉し來つて、此等を分類整理するといふが如き、言はゞ包括的方法を採ることをせず、各種の事實の中に就き最も出色的なるものを唯一つ擷んで、其の本質を徹底的に究め、之を抽象化することによつて、一つの（彼にとつては）普遍的なる原則を樹立したのである。かゝる研究方法には得難き長所がある。蓋し吾々は、それによつて或る經濟時代の本質的特徴を最も顯著に知ることが出来るからである。併し乍ら他方にそは大なる缺點を有つて居る。何故なれば、かゝる方法を採る人は、廣く各時代及び各地に於ける各種の經濟組織を比較研究するの勞を執らず、従つて自己の研究對象たる組織が有てる歴史的價值を秤量し得ないからである。而してリカアドに就ても同様のことが言ひ得らるゝ

であらう。

リカアドのこの缺點を最も鋭く衝いた最初の一人が、即ちジョーンズである。而してリカアドに對するジョーンズの攻撃が最も強く向けられたのは、地代論に對してである。併し地代論上の此等兩者の差異を述べることは、本稿の目的外に出づるから、暫らく之を省き、たゞジョーンズが如何なる方法論的武器を以てリカアドに敵對したるかを、次に述べるであらう。ジョーンズはリカアドを評して曰く、

『リカアド氏は才能裕かなる人である。彼は、純粹に假設的な諸々の眞理を甚だ器用に結合して、一つの體系を組み立てた。併しながら、現實のまゝの世界を一度び包括的に眺むる時、吾々は、彼れの體系が人類の過去及び現在の狀態とは全然矛盾せるものなることを十分に證明し得るであらう。』

即ち、ジョーンズの考によれば、リカアドの經濟學は餘りに非現實的である。それは、『人類の實際の經驗』(actual experience of mankind)を基礎としないで、『豫考せられたる實驗』(premeditated experiment)を根據として成立つてゐる。而かも、それは、かくして得られたる結論を以て、社會の諸階級の運命を斷定し、各人は到底それより脱出し得ざるものであるかの如く教へる。『經濟學が信用されないやうになつて來た』のは、洵に當然である。仍で經濟學は其の研究方法を根本的に改めなくてはならない。ジョーンズは言ふ、

『過去及び現在は、諸々の經濟的眞理を體系づける爲めの豊富なる材料を吾々に提供すること

6) *Distribution of Wealth*. (1831). Preface, p. vii.  
7) *Ibid.*, p. xvii.

に、力を協せてくれる。若しも吾々が、此等の材料を徹底的に觀察し、謙遜と細心とを以て推理を行ふも、尙ほ經濟學の總ての部門に於て健全なる知識を得難しとするならば、それは知的卑怯を示すに過ぎないであらう。<sup>8)</sup>』

勿論、かくの如く現在の經驗と過去の歴史とを廣く涉獵することは、困難なる仕事である。併し「かくしてこそ、吾々は、土地及び勞働の生産物が人間社會を構成せる諸種の階級の間に分配せらるゝ法則を終に明かになし得るの希望を、十分有つことが出来るのである。」<sup>9)</sup>これまでの學者は、「歸納」といふ方法よりも豫想 (anticipation) といふ道を選び、辛棒強く現在及び過去の諸事實を探究することを怠つて、一氣に一般原則に到達しようと思つた。だから眞理は彼方に逃げ去つて仕舞つたのである。<sup>10)</sup>

以上述べたる所により、ジョーンズが如何に經驗と歴史とを重んじたか、明かであらう。方法論の上に於て、彼がリカアドよりもマルサスを重んじ、又マルサスよりもハアシエルの如き自然科學者を貴びたる所以は、正に爰に存するのである。(註)マルサスは、リカアドの如くには原理の假設的證明を試みなかつた。彼は、人口の原理を論證するに當つて、實例を廣く諸國に求めた。併し乍ら其れも、結局は有名無實なる自然法則を豫定せる後の話であつて、事實が先きに立つてゐるのではない。之に反して、自然科學者は何よりも先きに觀察と實驗とを尊重し此等のものを通して得られたる經驗を基として理論を構成する。ジョーンズは、この自然科學的研究方法を經濟學に適用せんと欲したのである。この點についてヒルファディングは次の

8) *Ibid.*, p. xxi.

9) *Ibid.*, p. xxii.

10) cf *ibid.*, pp. xxii-xxiii.

如く言つて居る。

『ジョーンズは、當時著しく勃興しつゝありし自然科學より彼れの研究方法を得來つたから、リカアドの體系の中心たる、資本家的生産方法の絶對化に對して、彼れの歴史批判的立場を明かに拮抗せしめることが出來た。而してそれは、インドの社會狀態、特に其の土地所有關係に關する彼れの研究の賜物である。』<sup>11)</sup>

然らば、ジョーンズは、資本主義的生産方法の歴史的性質を如何に具體的に説明したか？これが次の問題である。

(註) ジョーンズは、マルサスの死後、彼れの後任者としてヘイリイベリの『東印度大學』の教授になつたのであるが、既に以前よりマルサスと相識つてゐた。人口論についてはマルサスと意見を異にしてゐたが、併しジョーンズはリカアドよりもマルサスにより近い學問上の立場に在つた。

又 John Herschel & William Whewell は有名な自然科學者であるが、既述の如く後者はジョーンズの遺稿を出版し、前者の著書 *On the Study of Natural Philosophy* の一部は、ジョーンズによつて、彼れの方法論の辯護として其の著『分配論』の附録に引用されて居る。是によつて觀ても、ジョーンズが如何に自然科學者に親しみ且つその方法論に傾倒してゐたか、了解するゝであらう。

『マルクス以前の總ての經濟學者の中で、ジョーンズは資本主義の歴史的性質を最も明かに認め且つ説いた人である』。(ヒルファディング) 彼は、英國に於て最も發達せる資本主義的社會形態を、他の經濟學者の如く普遍的のものであるかの如く看做することをせず、たゞ資本主義以前の社

11) R. Hilferding, *Aus der Vorgeschichte der Marx'schen Oekonomie*. 3. Richard Jones. (Die Neue Zeit. 8. Dezember 1911.)



會形態が進化して出来上つたものに過ぎないと觀、且つ他の諸國殊にアジアの諸國は未だこの状態に達してゐないと考へた。然らば、英國に於て最も發達せる資本主義（勿論ジョーンズはこの言葉を用ひてゐる譯ではないが）の特色は何かといふに、それは資本家と勞働者との分離である。曰く、

『收入中より貯蓄せられ集積せられたる富を、其の所有者への利潤を目的として、勞働者に前拂する』の制度は、『他の如何なる處に於けるよりもより廣く且つ獨占的にイングランド（大ブリタインにあらず）に於て行はれてゐる』<sup>12)</sup>而して、『最初の資本家的雇主——蓄積せられたる財より勞働の賃金を前拂し、且つこの前拂に對して（原文には from such advance となつてゐる）利潤の形で、收入を求めたる最初の人々——は、通常勞働者自身とは異れず階級であつた』<sup>13)</sup>これは、勞働者と資本家が同一體をなす所の社會状態に比して、望ましからざる状態であるかも知れないが、併し、吾々は、工業の進行の途上に於ける一段階——今日まで、向上しつゝある諸國民の進歩を徹しづけた所の——を形成するものとして、それを受容しなければならぬ』<sup>14)</sup>

以上の引用句によつても明かなる如く、ジョーンズは、勞働力以外に何物も有にざる無産勞働者が一方に存在し、彼等に勞賃を前拂すべく蓄積せられたる富を所し且つそれに對して利潤を要求する所の資本家が存在することを以て、進歩せる國の特異點なりと看做した。而かも、彼によれば、この状態は決して最終的のものでもなく亦理想的のものでもない。たゞ併し、吾々は、社

12) Literary Remains. (1859). "Text-Book etc." p. 421.

13) *Ibid.*, pp. 444-5. (圈點は新に附す)

14) *Ib. d.*, p. 445. (圈點は新に附す)

會進展上の必至的一段階として『それを受容しなければならぬ』のである。『將來に於て、勞働者と蓄積されたる資本の所有者が同一人に歸するやうな(即ち、非資本主義的なる——堀註)社會狀態が来るかも知れないし、又世界の一部の國民はそれに近づきつゝあるかも知れないが、併し、吾々が今觀察しつゝある諸國民の進歩の途上に於ては、未だ曾つてかゝる例はない。……アジヤ人は未だこの(資本主義の)段階にすら未だ到達してゐないのである』<sup>15)</sup>こゝに吾々はジョーンズの經濟的定命論を窺ふことが出来る。

さて次に來るべき問題は、右の如き特色を有する資本主義成立の由來についてジョーンズが如何なる歴史的説明をなしたか、といふことである。これに對する彼れの答は、便宜上之を二つに分けて考へることが出来る。一は資本主義的農業の、他は資本主義的工業の、成立についての説明である。

先づ資本主義的農業の成立に對するジョーンズの所説を見よう。彼れの考によれば、抑も農業上の地代には、農夫地代(Peasant rents)と農業者地代(Farmer's rents)との二大區別が在る。農夫地代といふのは、『勞働者が、他人に屬する土地を、自己の計算に於て耕作する時に、其の所有者に支拂はるゝ所の、生産物の一部を指す』<sup>17)</sup>。故に、『若しも人類の歴史に於て、一國の未開墾地を其の總ての住民の勤勞若くは必要に對して開放する(即ち、土地を其產にする)<sup>16)</sup>ことが、通常の事實であつたとするならば』、若くは、『土地は其の耕作に骨を折ることを肯んじたる人々によつて第一に所有さるゝを常としたといふことが、眞理であるとするならば』<sup>18)</sup>、地代なるものは少くど

15) 譯者補入

16) Ibid., p. 445.

17) この定義は Jones の原文その儘ではない。Distribution of Wealth, p. 2 及び p. 15. 參照

18) 譯者註

も暫らくの間發生しなかつたであらう。併しかゝる假定は『抽象的可能』(an abstract possibility)たるに止まり、世界の過去の歴史と現在の狀態とはそが『實際的眞理』(a practical truth)にあらざることを證明して居る。仍て人類は、『生存のために游牧狀態より農業に移らざるを得なくなるや』<sup>20)</sup>土地の所有者と非所有者とに分れ、後者即ち農夫若くは農業労働者は、前者に對して農夫、地代即ち第一的地代(Primary rents)を支拂はなければならないことゝなつた。<sup>21)</sup>而してこの時代の農業労働者は、彼等の勞賃を、『自己の計算に於て』換言すれば『彼等自身の勞働の結果たる土地生産物中より』取得するといふ、共通の特徴を有つて居る。(註)

(註) 資本主義以前の時代に於ける農夫を農業労働者といひ、又彼等の収入を勞賃といふは、今日の用語例に反するであらうが、こゝではジョーンズの言葉遣ひをその儘用ひたのである。

所が、『文明と富とが一定の進歩をなしたる後に於ては、労働者階級の勞賃は最早彼等が自身で土地より獲得したる收入より成立することなく、彼等が各種の仕事に携はつて居る間彼身以前貨をして生計を立てしむるに十分なる分量の食物が、資本家の手に蓄積さるゝやうになる』<sup>22)</sup>勿論、この變化は通常非農業階級に先づ起り、そが農業に現はるゝのは極めて遅く、今もなほこの變化を蒙らざる農業の範圍は世界中甚だ廣く残つて居るが、然し例へば英國に於けるが如く、『農業労働者と他の労働者とが共に資本家によつて養はれ且つ雇はれて居る地方も、比較的に甚だ小範圍に於てはあがあるが、現に在るのである。此等の資本家は、言ふまでもなく彼等の支持せる勞働の生産物を取得し、そして土地の所有者に對して約定されたる地代を支拂ふ責任を有つて居

19) Distribution of Wealth, p. 5.

20) *Ibid.*, p. 3.

21) Jones は、農夫地代を更に四種類に分ち、夫々について詳細なる研究をし、その紹介は本稿の範圍外に屬するから、他日の機會に之を譲る。

22) *Ibid.*, p. 187.

る』。<sup>23)</sup>而して『此等の地代は、文明の順序に於て常に既述の第一次的地代に相次いで發生するものなるが故に、第二次的地代(Secondary rents)と呼ばれ得べく、又、他人の勞働によつて耕作さるゝ土地の地代に對して責任を有する資本家は普通農業者(farmer)と呼ばれて居るから、此等の地代を農業者地代と名づけて農夫地代と區別しても良いであらう』。<sup>24)</sup>

以上吾々は、農業地代の進歩變遷に關するジョーンズの説明を觀ることによつて、同時に、彼れの資本主義的農業發達史論を知ることが出來たわけである。次は彼れの資本主義的工業發達史論である。既述の如く、ジョーンズの考による時は、資本家と勞働者との分離は、農業に於けるよりも工業に於て遙かにより早く實現された。併しながら、ジョーンズの當時に於ても、非資本主義的なる工業狀態の實例を非文明國に於て見出すことが出來たのであつて、彼は大體之を三つの形式に分つて觀察して居る。第一は支那の例である。彼は、初期のキリスト教宣教師達の報告に本いて、支那に於ては、手工業者が、私宅に於て生産せるものを、顧客を求めつゝ、戸毎に賣り歩くか、若くは(鍛冶屋ですらも)諸道具を町中持ち歩いて仕事を探す、といった形式の行はれ居ることを記述して居る。<sup>25)</sup>第二はインドの田舎の例である。其處では、『手工業者や他の非農業勞働者は、一村に實際必要なる人數だけ、村人の共同收入の一部を宛てがはれて、生計を保つことが出來るやうになつてゐる、而して全國到る處に於て、世襲的職人の群がこの資金によつて生活をして居る』。<sup>26)</sup>而して第三はインドの都會の例である。其處の手工業者は、特定の顧客殊に王侯貴族等の奢侈的欲望を充たすことを主たる仕事とするから、従つて彼等は顧客に始終くつ附いてゐ

23) *Ibid.*, pp. 187-8.

24) *Ibid.*, p. 12.

25) cf. *Literary Remains*, p. 395. & p. 445.

26) *Ibid.*, p. 446.

なければならぬ。『若しも彼等の顧客が長い間——否、時としては極めて短期間——其の居場所を變へるならば、非農業労働者は彼等に隨いて行かなければならぬ、然らざれば餓死するであらう。<sup>27)</sup>』

資本主義以前の工業は以上の如き種々なる形を採つて現はれる。併しながら、此等總てに共通なることは、工業労働者の勞賃は、農業労働者が自分達の生活維持に必要なよりも以上の分量に於て生産したる農産物——即ち土地の剩餘生産物——の所有者にして工業品の消費者たる人々の收入 (revenue) 中より直接に支拂はれる、といふ事情である。然るに文明國に於ては、かくの如き事情が一變する。勿論、如何なる經濟組織の下に於ても、農業に従事せる者と然らざる者とが存在する限り、後者の勞賃は前者の剩餘生産物を以て支拂はれなければならない。併し乍ら、一度工業労働者と工業品消費者との間に資本家なる階級が介在するやうになると、前二者間の關係は間接的となつて来る。即ち資本家は、蓄積されたる資本 (capital) の中より労働者への賃金を前拂し、而して労働者が彼れの爲めに生産したる貨物を消費者に賣却することによつて、労働者と消費者との關係を斷つて仕舞ふのである。何故資本家の出現が一國の産業の進歩にとつて必要であるか、といふ問題についてのジョーンスの説明は、後に述べるであらうが、併し他方より見れば、ジョーンスの言つて居るやうに、『資本家の雇傭せる労働者が生産したる貨物を買ふために、自己の收入を費さんとする顧客がないならば、彼は賣らんが爲めに生産することを中止しなければならぬ。若し又、資本家自身がこの貨物を消費するならば、彼れの資本は回收されない

27) cf. *Ibid.*, pp. 446-450.

であらう。(故に)資本家は、労働者のために、周囲の顧客達をして其の収入を支出させる役目を勤める所の、一個の代理者に過ぎないのである<sup>28)</sup>。』

以上述べたる所を要約するに、『諸國民の經濟的構造』は、『土地財産の制度及びその剩餘生産物の分配によつて最初に設定せられたる各階級間の關係』に始まり、『後にそは、富の生産及び交換並びに労働者の給食及び雇傭の代理執行者としての資本家の出現によつて、(大なり小なりの程度に於て)修正變化せしめられた』<sup>29)</sup>といふのが、資本主義の史的發展に關するジョーンズの見解の大綱である。而してこの見解の根柢には、『社會の全經濟的構造は労働の形態(die Form der Arbeit)を中心として變轉する』<sup>30)</sup>といふ主張が含まれて居る。蓋し、労働の形態とは労働者が彼等の生活資料を獲得する各種の形式を意味し、而してジョーンズは、前述の如く、勞賃が労働者自身の生産物を以て成るか、彼等の生産物を消費する者の收入中より支拂はるか、若くは資本家の資本中より前拂さるか、の區別を目して、『社會の各種の經濟的構造を理解するための主たる鍵だとなした』<sup>31)</sup>からである。

## 第二節 唯物史觀

前節に於て、私は、ジョーンズが如何に經濟學の歴史的研究を高調し、又資本主義社會の歴史的性質に就て如何なる解釋を下したるかを、略ぼ明かにすることが出來た。前にも述べたる如

28) *Ibid.*, p. 453.

29) *Ibid.*, "An Introductory Lecture." p. 560.

30) Marx, *Theorien über den Mehrwert*. III. S. 470.

31) a. a. O. S. 470-1.

く、彼れのこの研究方法は、正統學派殊にリカアドの抽象的研究方法を否認すべく提出せられたるものである。この意味に於て、私は、(本稿の表題の示す如く)ジョーンズを歴史學派の先驅者の一人に數へるのである。併し乍ら、茲に特に注意すべきは、私の謂ふ歴史學派とは、同じく英國の正統學派に對して獨逸に起つたところの、所謂『歴史學派』を指して居るのではない、といふことである。所謂『歴史學派』には、ロツシヤを首魁とするものとシヌモラを先頭に立つるもの(後者を『若き歴史學派』若くは『歴史II倫理學派』といふ)との別があり、兩者の主張には可なり

の徑庭はあるけれど、併し此等は、社會の經濟組織全體の發達を大觀するといふよりも、寧ろ個々の經濟現象——例へば貨幣、價格、勞賃、資本、分業、農業、工業、商業等——の歴史を辿ることに力を注ぎ、謂はゞ獨逸のブルジョア階級の生長史を各方面より考察するといふ、共通の特徵を有つて居る。従つて彼等に依れば、今日の社會經濟秩序は過去數百數千年間の試練と過誤を経て漸く生み出されたものであるから、それを更らに訂正する必要が若しあるとするならば、それは極めて慎重に且つ臆病に——即ち社會政策的に——なされなければならないことになる。之に反して、ジョーンズは各事項の歴史を個々獨立のものとして觀察したのではなくて、各時代の經濟組織を特徴づけるべき根本の事實——即ち勞働の形態——の變遷を中心として他の諸々の事實の變遷を物語り、斯くて組織全體の推移を明かになさんとした。故に彼に依れば、資本主義的經濟組織も、其の勞働の形態即ち資本と勞働との分離狀態が他に變化するならば、自ら消失することになる。(勞働者と資本家とが同一人に歸するやうな社會が將來發生するであらう、どのジョ

ーンズの見解に就ては、既に前節に於て述べた。此の點にジョーンズと所謂『歴史學派』との重大なる差異が在る。

かくて、ジョーンズは所謂『歴史學派』には屬せずして寧ろかのマルクスに甚だ接近して居ることが、推察さるゝであらう。但しジョーンズは、マルサスと同じく保守主義の人であり、従つてマルクスの如く、資本家と勞働者との階級的對立及び鬭争を未來社會實現の爲めの必要的手段なり、と解することなく、たゞ漠然と此等兩階級の利害關係が調和さるゝ時の來るべきことを樂觀的に豫想したに過ぎない。又マルクスは、其の研究方法に就ては、單なる歴史的歸納法の外にリカアド流の抽象的演繹法を手際よく併せ用ひたといふ特徴を有つて居る（註）に反し、ジョーンズは、リカアドなどが資本主義以前の狀態にまでも資本主義的觀念を與へ經濟上の諸法則を普遍化したることに反對すべく、資本主義以前の狀態中よりその爲めの材料を漁つた、といふ特色を有つて居るのである。而かも此等の點を除外する限り、此等兩者の學說の間には甚だ似通つたものがあるのである。前節に述べた『資本主義的生產方法の歴史的解釋』もその一つであるが、次に述ぶる『唯物史觀』に於て、特に兩者の思想的相似を（或は寧ろジョーンズがマルクスに與へたる影響を）觀ることが出来るであらう。

（註） ヒルファディングは、前掲の論文中に於て、マルクスとジョーンズとリカアドとの關係を述べたる後に、『ジョーンズの歸納的方法とリカアドの抽象的方法との特にマルクスの結合よりして、科學的マルキシズムの經濟學說が發生した』と云つて居る。



ジョーンスの唯物史觀を紹介するに當つて先づ明かにしなければならないのは、勞働の形態、即ち生産方法、生産力との關係についての彼れの意見である。彼れの考によれば、『生産的勞働の能率を左右する諸原因は、各個人の力の差を無視するならば、(一)勞働の繼續性、(二)知識と其の活用<sup>32</sup>の程度、及び(三)勞働を補助する機械力の發達程度の如何に在る。而して此等の事情は、正に前述の勞働の形態の三時期——即ち、(一)勞賃が勞働者の生産物の一部であつた時期、(二)それが消費者の收入より支拂はれたる時期、及び(三)それが資本家の資本より前拂さるゝ時期——の進轉に照應して生産力の發展に貢獻し來つたのである。今一例として勞働の形態の第二期と第三期との生産力を比較して見よう。例へばアジア諸國——支那や印度——は未だ勞働の形態の第二期にあり、西歐諸國は(少くとも工業に就ては——但し英國は農業に就ても)其の第三期に在る。支那や印度に於ては、前節に引用したる所によつて明かなる如く、手工業者は村人全體の需要を充たすべく彼等に儲はれて居るか若くは顧客を求めて町中を徘徊して居るかであるが、かくては工業的生産力が著しく減殺されざるを得ない。何故といふに、(一)彼等は町中を徘徊し又村人の需要を待つことによつて勞働の繼續を不可能とせられ、(二)彼等は『各人で自分自身の顧客を發見し、且つ彼が生産する品物を全部獨りで拵らへなければならぬから』<sup>33</sup>、分業、いふ知識を生産に活用することが出来ない、況んや(三)機械力を用ひて大規模に生産を行ふことは思ひも及ばない、からである。然るに勞働の形態即ち生産方法が一變して、西歐諸國に於けるが如く、資本家と勞働者との別が

32) cf. Literary Remains. pp. 347-8.

33) *Ibid.*, p. 397.

生じ、勞働者は資本家によつて勞賃を前拂さるゝやうになると、(一)勞働者は直接顧客に交渉を有たないから『繼續的に勞働することが出来るし、更に又彼等が實際繼續的に勞働するかどうかを監督するのが自分の任務であり且つ利益である所の一代理者(即ち資本家)が出現する』と共に、(二)『若し資本家が二人以上の人を雇ふならば、彼は各個人を其の最も適する部分の仕事に恒常的に就かしめて全體の仕事を上上げることが出来る』、なほ(三)勞働に支拂をする爲めの資本(ジョーンズは之を *Supporting or sustaining capital* 呼んだ)を所有せる資本家は、自分の雇傭せる勞働者の生産力を高め以て自己の利潤を増すべく、進歩せる道具、機械等を使用する。(機械等の如く勞働を補助するもの、購入及び維持に充てらるゝ資本を、ジョーンズは *auxiliary capital* と呼んだ。)(註)例へば『英國に於て各種の仕事に用ひられて居る蒸氣機關の力は、六億人の力に等しいと計算されて居るが、勞働者の現在數を四百萬人と假定するならば、此の數の勞働者の力は蒸氣機關なき場合の彼等の力の百五十倍に當つて居るわけである』。

(註) 資本に關するジョーンズの意見を更らに詳しく述べることは本稿の目的外であるから、茲には之を省くが、たゞ彼が、在來の如く資本を固定資本と流動資本とに分つことを止めて、之を『維持資本』と『補助資本』とに區別したことは、大いに注目に値すると思ふ。蓋し在來の區別は資本それ自體の耐久程度を標準となしたるに反し、ジョーンズのそれは資本の勞働に對する關係の差異を標準となして居るからである。彼れの所謂維持資本』及び『補助資本』の孰れにも粗生原料が含まれてゐないのは、この區分法の重大なる缺點ではあるが、併しそはマルクスの『可變資本』及び『不變資本』の區別により接近してゐるやうである。何となれば、ジョーンズによれば、『維持資本』は『可變資本』の如く、利潤獲得の目的を以て勞働者に前拂さるゝ富であるに對し、『補助資本』は『不變資本』の如く、勞働生産力の増進を助成しつゝそれ自體の再生産を要求するものだ

譯者註  
34) *Ibid.*, p. 396.  
35) *Ibid.*, p. 397.  
36) *Ibid.*, p. 63.  
37) *Ibid.*, p. 456.  
38)

からである。但しジョーンズは、マルクスのやうに労働價值論より出發して剩餘價值若くは利潤の發生を説いたのではないから、『維持資本』に可變性を又『補助資本』に不變性を認めたわけではない。たゞ漠然と、『補助資本』が再生産されなければ、資本家は彼れの財産を減少すべきこと、及びそれ以上に利潤が得られなければ、彼は生産に資本(『補助資本』と『維持資本』を含む)を論じないであらうことを、論じてゐるに過ぎない。<sup>41)</sup>

さて以上により、労働の形態即ち生産方法と生産力との間に密接不可離の關係がある、このジョーンズの見解は明かになつたであらうが、之を要するに、生産方法の進化といふことは結局生産力の進歩といふことを意味して居ることとなる。而かも他面にこの生産方法こそは、社會の經濟的構造を特徴づける基本體である。<sup>42)</sup> 以て生産力と經濟組織との關係を知るべきである。併しながら、ジョーンズは、常に生産力若くは労働の形態と經濟組織との關係を歴史的に觀たいけではなく、更に進んで社會の上層建築に對する唯物史觀的解釋を試みて居るのである。曰く、『社會が其の生産力を變へるにつれて、それは必然的に其の習慣をも變へる。習慣の進展につれて、一社會の各種の階級は他の諸階級と新なる關係によつて結びつけられ、新なる社會的地位を占め、且つ新しい道德的及び社會的危險によつて並びに社會的及び政治的發展の新しい條件によつて包圍され居ることを、發見する。』<sup>43)</sup>

『大なる政治的、社會的、道德的、及び知的諸變改は、社會の經濟組織に於ける變化及び産業實行の手段及び力——それが豊富なる場合もあり貧弱なる場合もある——の變化に隨伴する。此

39) cf. *ibid.*, p. 415.

40) cf. *ibid.*, p. 399.

41) cf. *ibid.*

42) cf. *ibid.*, p. 560. (本稿第一節に引用せるを看よ)

43) *ibid.*, pp. 410-411.

等の變化は、それを爲し遂げたる國民の間に見出さるゝ各種の政治的及び社會的要素の上に、必然的に支配的影響を及ぼす、而かもこの影響は、更らに、國民の知的特性、習性、慣行、道徳、及び幸福の上に擴延するものである。<sup>044)</sup>」

(右大意の原文)

“As communities change their powers of production, they necessarily change their habits too. During their progress in advance, all the different classes of the community find that they are connected with other classes by new relations, are assuming new positions, and are surrounded by new moral and social changes, and new conditions of social and political excellence.”

“Great political, social, moral, and intellectual changes, accompany changes in the economical organisation of communities, and in the agencies and the means, affluent or scanty, by which the tasks of industry are carried on. These changes necessarily exercise a commanding influence over the different political and social elements to be found in the populations where they take place; that influence extends to the intellectual character, to the habits, manners, morals, and happiness of nations.”

即ちジョーンズの考によれば、社會の生産力の變化は其の勞働形態の變化に照應し、それに伴つて社會の階段的關係が變化するが、此等を總稱して社會の經濟組織といふならば、其の變化に伴つて、社會の政治的構造、道徳的觀念、及び知的特性が一新さるゝこととなるのである。是れマルクスが『經濟學批判』の序言で、

『人類は、彼等の生活の社會的生産に於て、一定の、必然的の、彼等の意思より獨立せる關係

44) *Ibid.*, p. 405. 尙ほ Jones は、地代の各形態に應じて、社會の政治的、道徳的特徴が異なることを述べて居る。—cf. *Distribution of Wealth*, p. 5.

を、即ち彼等の物質的生産力の或る一定の發展階段に適應するところの諸々の生産關係を、與へられたものとして受取る。これ等の生産關係の總和は、その社會の經濟的構造、即ち法制上及び政治上の上層建築がその上に立ち、一定の社會的意識形態がそれに適應するところの、現實の土臺をなす。物質的生活資料の生産方法は、社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程一般を條件づける。人類の意識が彼等の存在を定めるのではなくて、寧ろその反對に、人類の社會的存在が彼等の意識を定めるのである。』(宮川實氏譯による)

と言へるに、甚だ相似て居る。たゞ兩者の著しく異なる點は、マルクスは社會進化の必要的なる助力として、換言すれば生産力と生産關係若くは所有關係との矛盾の必要的なる打壞力として、階級闘争といふ手段を歴史的に又現實的に提示したるに反し、ジョーンズは之を認めず、たゞ過去より現在への又現在より未來への社會の進歩を人間の道德的意識の進歩に歸因せしめた、といふことである。即ちジョーンズは言ふ、

『社會に於ける諸々の變革をして最も順調なる結果を齎らさしむべく充たされなければならぬ。い所の各種の條件は、社會の富及び生産力がより進むにつれて、より多くなり又より困難となる。而してこの目的は、世界の道德界の總ての部門に通曉したる後に、甫めて達し得らるゝのである。だからその條件は甚だ六ヶ敷いものである、が併し決して不可能ではない。』

(英國は最も早く資本主義化された國である。『併し、殘念なことではあるが私は躊躇なく言ひたい、英國は同様にその生産力を發展せしめつゝある他の一國民の前途を物語るべき安全なる見本であつてはならない。』)

(英國に於ける諸々の失敗が)『過去に對して遺憾の念を起させるにしても、尙ほそれは未來に對

してより、良き希望を與へるであらう。』<sup>(45)</sup>

右の引用句によつても明かなる如く、ジョーンズは、『覆轍を踏むこと勿れ』てふ金言によつて警められたる人間の意思が、社會の進歩にとつて力を有つて居ることを、主張して居るのであるが、この主張は實にマルクスの階級闘争説と違つて居るばかりでなく、亦ジョーンズ自身の前述の唯物史觀にも悖つて居るわけである。

以上はジョーンズの唯物史觀の『公式』及びそれと彼れの他の主張との矛盾についての説明であるが、私は最後に、彼がこの『公式』に對して如何なる具體的證明を與へたかを紹介して、筆を擱くであらう。ジョーンズは經濟組織と政治組織との關係について最も多く論じて居る。例へば資本家の出現に伴ふ政治組織の變化について、彼は次の如く言つて居る。

『資本家が全國民の勞賃を前拂するやうになると、(勞働形態の第三階級の出現を指す——掘註)、勞働者と彼等の雇傭者との關係及び政治團體に於ける此等兩者の地位に、全き變化が起る。

(一)『一國の土地が(國王又は封建貴族によつて)擅有さるゝ時は、農夫の政治的且つ社會的服従——隸屬と言つても良いであらう——を確保することを絶對に必要とするやうな政治制度が生み出される。舊世界の狀態は正にそれであつた。』<sup>(46)</sup>『これが農奴の起源である。』<sup>(47)</sup>

(二)次には手工業者が現はれるが、その時には、『假ひ彼等が土地を棄て去つたとしても、土地所有者の所得はその儘であり、たゞそれに伴うて多少の不便を蒙るだけのことであるから』、彼等は手工業者を政治的隸屬狀態に置くの必要を感じない。自由民はかくて生れた。<sup>(48)</sup>

(三)『併し勞働者階級が資本家に雇はるゝやうになると、土地の所有者に對する彼等の依存關係が無くなり、雇主に對する彼等の重要さが感ぜられ出して來る』。資本家に、彼等の資本が増

45) *Ibid.*, pp. 411-2.

46) *Ibid.*, p. 456.

47) *Ibid.*, "Lectures on Labour and Capital", p. 85.

48) cf. *ibid.*, p. 458.

加するにつれて、又之を増加せんが爲めに、絶えず勞働市場に於て競争する。勞働者の地位が高まり、資本家と對等になる。かくて、『以前は輕蔑され、無視され、且つ無勢力なりし職人達が、一躍して、非農業資本所有者の收入を生産するための必要なる一團體となる。而して資本家と勞働者とは、今や互に依存の關係に立つが故に、新らしき結合に於て、社會の富、力、及び政治を左右する所の新たななる一要素となる。』<sup>49)</sup>

かくて、各時代の政治組織の基調に對する各經濟組織の影響は、不十分ながらジョーンズによつて示された。併しながら、彼は、此等の土臺と其の土層建築たる『社會的意識形態』(マルクス)との關係については、殆んど例示的證明を試みないばかりでなく、(一)社會の生産力の進歩と共に、奢侈、利己、貪慾等の惡徳が跋扈し、より高尚にしてより純粹なる公私の徳性が妨げられるに至る、との議論や、(二)その反對に『富の生産者として低き地位を占めて居る國民は、必然的に道徳、知識、若は幸福の諸要素を缺いて居る』、との意見を共に反駁すべく、

『國民全體の道徳的及び知的資質の合理的且つ可能的發展が、生産力の進歩に伴ふ諸變化と手を携へて進むならば、振興しつゝある國民の社會的及び政治的前途を悲觀する理由は毫もない』<sup>50)</sup>など、言つて居る。徒らに未來を樂觀し、而かそれを達する爲めの手段を歴史の中に求めずして、之を道徳や知識の中に見出したる點に於て、ジョーンズは唯物史觀論者より理想主義者に早變りして仕舞つたのである。しかし斯くは言ふものゝ、このことによつて、リカアド流の抽象的法則に對して否定の第一聲を挙げたる歴史流學者としての彼れの功績が沒せられる譯はないであらう。而して彼れの學說の行詰りを展開したのは、リカアドの學說の行詰りを展開したると同じ人、即ちマルクスである。(二、三、稿了)

49) cf. *ibid.*, pp. 458-460.

50) *Ibid.*, p. 412.